

1. 頭痛

概 説

頭痛は自覚症状の1つである。頭痛は単独で出現する場合もあるが、多くの急性疾患や慢性疾患のなかでも出現する。本篇では頭痛を主訴とするものについて述べることにする。

頭痛を引き起こす原因にはいろいろあるが、分類すると外感性のものと内傷性のものに分類することができる。頭は「諸陽の会」とか、「清陽の府」とかいわれており、髄海が所在する部位でもある。五臓の精華である血や六腑の清陽の気は、ともに頭に上る。外感諸邪が留まって清陽を抑止したり、内傷諸疾により気血が逆乱して瘀血阻絡となったり、脳の栄養が悪くなったりすると、直接または間接的に頭部に影響し頭痛が起こることになる。鍼灸の臨床でよく見られるものは内傷性の頭痛である。各方面でいろいろ治療を受けよくなかったために鍼灸治療を受診するものが多い。このため本篇で紹介する症例は、内傷性頭痛が多くなっている。

一般の頭痛と副鼻腔炎、鼻咽頭癌、中耳炎、乳突炎、齶歯、緑内障、脳腫瘍、頭部外傷などによって起こる頭痛とは鑑別する必要がある。

弁証のサイドから分類すると、風寒、風熱、風湿、肝陽、腎虚、気虚、血虚、気血虧虚、痰濁、瘀血、胃火頭痛などの証型がある。また疼痛部位のサイドから分類すると、太陽頭痛、陽明頭痛、少陽頭痛、厥陰頭痛といったものがある。

弁証施治

頭痛の弁証を行うためには、現病歴を詳しく尋ねたり、病因を探す以外に、頭痛の経過、痛みの性質や痛みの起こる時間、痛みの特徴、部位ならびに随伴症状といった内容を関連させて行う必要がある。つまりこういった内容にもとづいて虚実、寒熱、気血の違いを弁別し、証型を分別して施治を行うのである。頭痛だから頭に鍼を刺すという方法は、全面的な治療とはいえない。

外感頭痛は、一般的には急に発病し、痛みが激しいという特徴がある。痛みの性質は掣痛^{せい} [ひきつった痛み]、跳痛 [ずきずきする痛み]、灼痛、脹痛、重痛、持続的に痛むといっ

たものが多く、これらは実証のものが多い。治法は去邪を主とすればよい。一方、内傷頭痛は一般的には発病が緩慢である。内傷頭痛の痛みの性質は隠痛〔持続性の鈍痛〕、空痛〔空虚感を伴う痛み〕、昏痛〔ぼんやりした痛み〕といったものが多い。痛みも長期にわたるものが多く、疲れると痛みが起こるといった特徴がある。痛みの発作は断続的なものとなる。内傷頭痛は虚証であるものが多く、治法は補虚を主とすればよい。虚証の頭痛では、本虚標実であるものが多く見られるが、標実に対しては注意しながら局所取穴により、佐として通絡止痛をはかるとよい。また虚証の頭痛には、局所穴への補法は慎んだほうがよい。標実に対して局所穴へ補法を施すのはなおさら慎むべきである。

ところで頭は諸陽の会といわれている。手足の三陽経脈が頭に循行しているためである。また厥陰経脈も上って頭頂部に会している。一般的に太陽頭痛は後頭部から項部にかけて痛み、陽明頭痛は前額部と眼窩部に起こる。また少陽頭痛は側頭部から耳にかけて痛み、厥陰頭痛は頭頂部に起こる。厥陰頭痛は目系におよぶ場合もある。臨床上は疼痛部位にもとづき、経絡の分布を参考にしながら循経取穴と局所取穴をうまく応用するとよい。

1 風寒頭痛

[主証] 頭痛、痛みは項背部におよぶ。悪風、さむがりといった症状がある。これらの症状は風寒を感受すると増強したり誘発しやすい。頭を圧迫したがる。口渇はない。舌苔は薄白、脈は浮または浮緊となる。

[治則] 疏風散寒、通絡止痛

[取穴] 列缺、風池（瀉）、阿是穴（瀉、加灸）。

風池、百会、阿是穴（灸瀉）。

上処方により頭部の風寒を散じ温経止痛をはかるとよい。

[応用] 寒邪が厥陰経を侵犯して頭頂部痛が起こり、涎を吐いたり、四肢厥冷を伴い、舌苔が白で脈が弦である場合は、大敦、百会（灸）により厥陰の寒邪を温散させるとよい。

2 風熱頭痛

[主証] 頭部に脹痛、または裂痛〔われるような痛み〕が起こる。発熱、悪風、口渇、咽頭部痛、便秘、尿黄、顔面紅潮、目の充血といった症状を伴う。舌質は紅、舌苔は薄黄、脈は浮数となる。

[治則] 疏風清熱、利竅止痛

[取穴] 曲池、風池（瀉）、阿是穴（瀉または点刺出血）。

合谷、外関、風池（瀉）、または阿是穴（瀉）を加える。

[応用] 便秘、口や鼻の瘡があり腑気不通であるものには、足三里、天枢に鍼で瀉法を施し、通腑泄熱をはかるとよい。

3 風湿頭痛

[主証] しめつけられるような頭痛が起こる。肢体のだるさ、胸悶、食欲不振、尿不利を伴う。大便是泥状の場合もある。舌苔は白膩、脈は濡となる。頭痛、頭重は気候の変化と関係する場合がある。

[治則] 去風勝湿、利竅止痛

[取穴] 風池、陰陵泉（瀉）、あるいは阿是穴（瀉）を加える。

[応用] ◇湿が強く食欲不振、胸悶がある場合は足三里（瀉）を加えると、去風勝湿、和胃寛中の効を収めることができる。

◇悪心、嘔吐がある場合は豊隆または上脘（瀉）を加えて降逆止嘔をはかるとよい。

◇頭痛、身熱して汗が出る、口渇、胸悶といった症状が夏季に起こり、それが暑湿による場合は、陰陵泉（瀉）、曲沢（点刺出血）により清暑化湿をはかるとよい。

4 肝陽頭痛

[主証] 頭痛、頭暈が起こる。あるいは頭のひきつる痛み、痛みは頭の一側が強い、または両側ともに強い。心煩、怒りっぽい、不眠、顔面紅潮、目の充血、口苦といった症状を伴う。舌質は紅、舌苔は薄黄、脈は弦で有力となる。症状は精神的な緊張により誘発することが多い。

[治則] 平肝潜陽、通絡止痛

[取穴] 太衝、風池、百会（瀉）

この処方平肝熄風に重点をおいている。肝陽上亢、肝風内動による頭痛、眩暈の治療に用いることができる。

[応用] ◇腎水不足のために水不涵木、肝陽上亢となり、肝陽が清空^{じょう}に上擾して起こる肝陽頭痛には、行間、風池（瀉）、復溜（補）により平肝熄風、育陰潜陽をはかるとよい。これは鎮肝熄風湯の効に類似している。

◇肝気鬱結であったものが化火して肝火となり、肝火が清空に上擾して頭痛が起こる場合がある。この場合には頭痛は激しい頭痛となり、顔面紅潮、目の充血、脇痛、口苦といった症状が見られる。耳鳴りを伴う場合もある。また尿は黄、舌質は紅、舌苔は黄、脈は弦数となる。行間、丘墟、阿是穴（瀉）により清肝瀉火、通絡止痛をはかるとよい。あるいは竜胆瀉肝湯の効に類似している太衝、丘墟、陰陵泉（瀉）を用いてもよい。

◇偏頭風は片頭痛ともいわれている。肝経風火が上擾して起こるものが多い。この場合は足少陽胆経が循行している部位に片頭痛が起こる。激しい頭痛が突発的に起こり、同側の目や歯に痛みがおよぶ場合もある。風池（瀉）、太陽（瀉または点刺出血）、太衝（瀉）、あるいは阿是穴（瀉）を加えて平肝熄風、通絡止痛をはかるとよい。

5 腎虚頭痛

[主証] 頭部に空痛が起こる。眩暈、腰膝痠軟〔だるくて力が入らない〕、精神疲労、無力感、遺精、帯下、耳鳴り、不眠といった症状を伴う。舌質は紅、少苔、脈は細無力となる。

[治則] 養陰補腎益腦

[取穴] 復溜、腎兪（補）

[応用] 腎陽不足の場合には頭痛の他にさむがり、四肢不温、顔色皸白が見られ、舌質は淡、脈は沈細となる。この場合は関元、太谿、腎兪（補）により温補腎陽、補益精血をはかるとよい。この処方では右帰飲の効に類似している。

6 気虚頭痛

[主証] 頭部に空痛が起こる。痛みは鈍痛であり早朝がひどい。あるいは疲労時に増強する。精神不振、倦怠、息切れ、四肢無力、食欲不振といった症状を伴う。舌苔は薄白、脈は虚または細で無力となる。

[治則] 補中益気、あるいは佐として通絡止痛をはかる。

[取穴] 合谷、足三里（補）、あるいは百会（補）を加える。

合谷、足三里で補中益気をはかり、百会を加えて清気が頭に上昇するのを助ける。この処方は補中益気湯の効に類似している。

[応用] ◇瘀血阻絡を伴い、痛みの部位が固定しているものには、合谷、足三里（補）に阿是穴（瀉）を加えて通絡止痛をはかるとよい。

◇虚中挟実のものには、合谷、足三里（補）、百会（瀉）を用いる。これは補中寓散〔補をベースにして少し散じること〕の意を取ったものである。

◇気虚に腎虚を伴っているものには、合谷、太谿（補）により益気補腎をはかる。

7 血虚頭痛

[主証] 長々と続く頭痛が起こる。頭暈、目眩、倦怠。顔色蒼白といった症状を伴う。舌と唇の色は淡、脈細弱または虚瀯となる。

[治則] 補血養血、佐として通絡止痛をはかる。

[取穴] 三陰交、膈兪（補）

[応用] 寒邪阻絡に対しては阿是穴（灸瀉）を加えて通絡止痛をはかるとよい。

8 気血虧虚頭痛

[主証] 頭痛、頭暈が起こる。頭痛は長々と続き疲労時に増強する。精神疲労、無力感、食

欲不振、心悸、怔忡といった症状を伴う。顔色不華、舌質は淡、舌苔は白、脈は細弱無力となる。

[治則] 補養気血、あるいは佐として通絡止痛をはかる。

[取穴] 合谷、三陰交（補）

[応用] ◇頭痛が強いものには、阿是穴（瀉）を加えて通絡止痛をはかる。心悸、不眠のあるものには、神門（補）を加えて養心安神をはかる。この処方は人參養榮湯の効に類似している。また気虚が顕著であるものには足三里（補）を加えて益気補中をはかる。寒邪阻絡を伴い、寒を感受すると誘発したり増強するものには、阿是穴（瀉、灸を配す）を加えて温経散寒をはかるとよい。

◇心脾不足の場合、心虚のために血液の循環が悪くなり、脾虚のために生化の源が不足する。そのために気血が頭部にいたらないと頭痛が起こる。この場合は神門、三陰交（補）により補益心脾をはかるとよい。

9 痰濁頭痛

[主証] 頭痛、昏憊^{ぼう}が起こる。胸脘満悶、痰涎を嘔する、食欲不振といった症状を伴う。舌苔は白膩、脈は滑または弦滑となる。

[治則] 化痰降逆、通絡止痛

[取穴] 豊隆、陰陵泉（瀉）

上処方には去湿化痰降逆の効がある。これは二陳湯の効に類似している。阿是穴（瀉）を加えると通絡止痛をはかることができる。また上処方に脾兪（補）を加えると健脾去湿、化痰降濁の効があり、さらに佐として通絡止痛をはかることができる。

[応用] ◇風痰による場合は、百会、豊隆（瀉）、陰陵泉（補）により健脾化痰、熄風止痛をはかるとよい。これは半夏白朮天麻湯の効に類似している。

◇口苦があり、舌苔黄濁、大便不暢^{ちよう}などが出現している場合、これは痰湿久鬱化熱の象である。豊隆、内庭、阿是穴（瀉）により清熱化痰、通絡止痛をはかるとよい。

◇雷頭風といわれるものがある。これは湿熱酒毒に痰がからんで上衝して起こる場合が多い。頭痛、頭中に雷鳴のような音がし、頭顔面部に赤いできものや腫れ物ができるといった症状が出現する。治療は豊隆、陰陵泉、合谷（瀉）、阿是穴（点刺出血）により除湿化痰、清熱解毒をはかるとよい。

10 瘀血頭痛

[主証] 長期にわたる頭痛が起こる。疼痛部位は一定している。錐で刺すように痛む場合もある。舌質は紫暗、脈は沈瀯または細瀯となる。

[治則] 活血去瘀、通絡止痛

[取穴] 三陰交、阿是穴（瀉）

- [応用] ◇寒邪を伴うか、あるいは寒を感受すると誘発するものには、阿是穴（灸を配す）を加えて温経散寒、活血通絡をはかるとよい。
- ◇瘀血阻絡による頭痛で軽症のものは、局部の経穴を瀉して通絡去瘀止痛をはかるだけで効を収めることが多い。

11 胃火頭痛

- [主証] 前額部痛のものが多く、あるいは前額部熱痛となる。咽頭の乾き、口臭、煩渴して飲む、便秘といった症状を伴う。舌質は紅、舌苔は黄または薄黄、脈は数または洪数となる。
- [治則] 清降胃火、通絡止痛
- [取穴] 解谿、足三里（瀉）
- この2穴で清胃泄熱をはかる。あるいは頭維または陽白、阿是穴（瀉）を配穴して通絡止痛をはかる。
- [応用] 気分が熱があって煩渴が強いものには合谷、内庭に鍼で瀉法を施す。便秘がひどい場合は中脘、天枢、足三里、阿是穴に鍼で瀉法を施す。

上記の分類にもとづく治療の他に、さらに経絡の循行や頭痛の部位にもとづき、循経取穴と局所取穴を併用して次のように治療することができる。

(1) 太陽頭痛：後頭部が痛む。痛みは項部におよぶ場合がある。

循経取穴としては崑崙（瀉）により足太陽経気の宣通をはかるとよい。熱鬱熱痛であるものには、崑崙に透天涼を配して太陽経鬱熱の清宣をはかるとよい。また局所取穴としては天柱または阿是穴（瀉）を配穴するとよい。これらにより太陽経気を宣通させ通絡止痛の効を収めることができる。硬膜外麻酔によって起こる頭痛には、百会、大椎、風府（瀉）を用いるとよい。

(2) 少陽頭痛：側頭部が痛む。痛みは耳におよぶ場合がある。

循経取穴としては丘墟（瀉）により足少陽経気の宣通をはかるとよい。鬱熱が上攻し循経により頭部に上擾しているものには、丘墟に透天涼を配して少陽経気を清宣するとよい。この場合は鍼感が経に沿って頭部にいたると良い効果を収めることができる。局所取穴としては太陽、風池（瀉）を配穴するとよい。これらにより少陽経気を宣通させ通絡止痛の効を収めることができる。

(3) 陽明頭痛：前額部が痛む。痛みは眼窩におよぶ場合がある。

循経取穴としては内庭（瀉）により足陽明経気の宣通をはかるとよい。熱鬱熱痛があるものは、内庭を解谿（瀉）に改めて陽明経気の清宣をはかるとよい。この場合、鍼感が経に沿って頭部にいたると良い効果がある。局所取穴としては頭維または陽白、阿是穴（瀉）を配穴するとよい。これらにより陽明経気を宣通させ通絡止痛の効を収めることができる。

(4) 厥陰頭痛：頭頂部が痛む。痛みは目系におよぶ場合がある。

循経取穴としては太衝（瀉）により足厥陰経気の宣通をはかるとよい。熱鬱熱痛があるものは、太衝（瀉）に透天涼を配して厥陰経気を清宣するとよい。局所取穴としては百会、阿是穴（瀉）を配穴するとよい。これらにより厥陰経気を宣通させ通絡止痛の効を収めることができる。

『傷寒論』377条には「乾嘔し、涎沫を吐し、頭痛むものは、呉茱萸湯これを主る」とある。肝寒犯胃、濁陰上逆となる呉茱萸湯証には、中脘、大敦（灸）、公孫（瀉）により暖肝温胃、降逆去濁をはかるとよい。この処方ハ呉茱萸湯の効に類似している。

症 例

[症例1] 腎虚頭痛

患者：女、44歳、初診1967年9月15日

主訴：頭痛を患って20年余りになる。

現病歴：20数年来、眉間と両眼窩部が痛む。痛みがひどい場合は悪心と眼球痛が起こる。痛みは早朝に強い。冷やすと発作が起こりやすく、温めると痛みは軽減する。食欲不振、食後の悪心を伴っている。口からは水様の涎が出る。顔面は蒼白であり、舌苔は薄白、唇の色は淡白、脈は細数浮である。

この数日来は、悪寒発熱を感じ（ただし感冒の症状はない）、左側の上下の歯に隠痛が起こる。この痛みは按じると軽減する。長期にわたって中西薬を服用したが効果はなかった。

弁証：腎虚頭痛

治則：温補腎陽

取穴：関元、復溜（補）。隔日治療とした。

効果：3診後には頭痛は著しく軽減し、他の症状は治癒した。

考察：本症例の症状は複雑である。早朝に痛みが強いというのは、気虚頭痛に似ている。冷やすと発作が起こりやすいというのは、寒邪阻絡による頭痛に似ている。また痛みの部位が固定しているというのは、瘀血頭痛に似ている。眼窩部の痛みが眼球に及ぶというのは、厥陰、陽明頭痛に似ている。痛みが激しいと悪心が起こったり、食欲不振、食後の悪心を伴うというのは、痰濁頭痛に似ている。眉間の痛みがあるが、この場合は鼻疾患とは関係がなさそうである。顔面蒼白、舌苔薄白、唇淡白は脾陽不振あるいは気血虧虚の現れに似ている。このように症状が複雑であるため、正確に証型を定めることが難しく、したがってなかなか効を奏さなかったのであろう。本症例は久病であること、そして顔面蒼白、唇淡白、口から水様の涎が出ていることから、まず虚であることは疑いの余地がない。さらに総合的に分析すると、病の本は腎にあり、腎陽虚を主な病理とした頭痛証候であることがわかる。

腎陽不足のために陽気が頭部に到達できないと、清陽がふるわなくなる。そのため

に早朝に痛みが強くなり、冷やすと発作を起こしやすく温めると軽減するのである。腎陽虚衰となり火が土を生じないと脾陽不振となる。そのために食欲不振、水様の涎、顔面蒼白、唇淡白などの症状が出現していると考えられる。

腎は骨を主っており、肝は目に開竅している。眼窩痛の眼球への放散は、肝腎不足に属しており、その本は腎虚である。頭痛がひどい場合に悪心が起こるのは、頭痛の部位と関係がある。

関元に補法を施して、真火を補益し元陽を補益すると、さらに益火生土により脾陽を振るいたせることができる。これは「火の源を益し、以て陰翳を消す」といわれているものである。腎経の金穴であり母穴である復溜に補法を施し、滋陰補腎をはかった。関元と配穴することにより、補陽配陰をねらっている。これらの配穴により、頭痛および随伴症状を治癒させることができた。

腎は骨を主っており、歯は骨の余である。歯に隠痛があり、按じると軽減するというのは、腎陰不足、浮火上越によるものである。復溜に補法を施して滋陰補腎をはかったが、これは「水の主を壮じ、以て陽光を制す」の意を取ったものである。脈象の細数浮と、この数日來の悪寒発熱は、歯痛と関係したものである。

〔症例2〕 気血双虧頭痛

患者：女、26歳、初診1976年9月14日

主訴：頭痛を患って8年になる。

現病歴：右目の眼花〔目がくらみ物がはっきり見えない症状〕、左側の頭部脹痛から始まり、これらの症状がしだいに両側に交互に出現するようになった。すなわち左頭痛が起こると右目の眼花が起こり、右頭痛が起こると左目の眼花が起こるのである。明け方には前額部の脹痛がとくにひどい。平時は食後にすぐ空腹感が起こり、腹中が空虚に感じられる。また息切れ、頭暈、眼花、全身のだるさ、精神倦怠、四肢無力、手指のふるえ、心悸、多夢などの症状がある。空腹感が強い時には、毎晩2回は食事をとる。月経は20～23日を周期とし、経量は多い。舌質は淡、舌苔は白であり、舌に齒痕がある。脈は沈細無力である。

弁証：気血虧虚型の頭痛

治則：補益気血

取穴：初診～7診：合谷、三陰交（補）。8～10診：上処方に太陽（瀉）を加える。

効果：2診後、腹部の空虚感と頭痛は軽減した。3診後、頭にひどい痛みは起こらなくなり、心悸、手指のふるえが軽減し、腹中の空虚感はなくなった。四肢無力と精神倦怠は改善していない。6診後、頭痛は著しく好転した。8診後、すべての症状は治癒し、頭痛が起こりそうな感じがするだけとなった。9診後、症状は眼花のみとなった。10診では治療効果の安定をはかった。

考察：本症例は気血虧虚型の頭痛である。湯液では八珍湯証になる。頭部の脹痛は氣滯によるものに似ているが、証候群として見ると、やはり気血虧虚のため清陽が頭部に

昇らないために起こった頭痛と考えられる。したがって全体治療、弁証取穴として合谷、三陰交を取り、補法を施して効果を収めることができたのである。8～10診で太陽（瀉）を加えた目的は、局所取穴により佐として脈絡の通暢をはかり、頭痛再発の勢いを緩めることにある。

〔症例3〕 気虚、腎虚頭痛

患者：男、35歳、初診1971年9月7日

主訴：頭痛を患って1カ月余になる。

現病歴：この1カ月余り前額部および頭部正中線の部位に強い痛みが起こるようになった。午前に痛みは強い。汗が出たり夕食をとった後には頭痛は軽減する。さらに頭暈、息切れ、身体のだるさ・無力感、嗜臥、多夢、不眠などの症状を伴っている。平素から脾胃虚弱であり消化がよくない。脈は虚弱であり、両側の尺脈がとくに弱い。舌質は嫩紅で無苔である。

弁証：気虚、腎虚型の頭痛

治則：益気補腎

取穴：合谷、氣海（補）。1～2日おきに鍼治療を行った。

効果：3診後には頭痛と随伴症状は著しく軽減し、6診で治癒した。1972年9月10日に再発していないことを確認した。

考察：本症例の頭痛は気虚・腎虚型の頭痛である。頭痛は午前に強く、身体のだるさ・無力感、嗜臥、息切れ、脈虚弱などを伴っているが、これらは気虚の象である。したがって合谷に補法を施して益気をはかった。多夢、不眠、頭暈を伴い、舌質嫩紅無苔であるのは、腎陰不足の現れである。したがって腎経の母穴である復溜に補法を施して滋陰補腎をはかった。これらにより益気補腎の効を収めたのである。もともと鍼による局部治療を2回行ったが無効であった。これは実証でないことを示している。この場合、局部止痛をはかるだけでは効果を収めることはできないのである。

〔症例4〕 風熱痰火頭痛

患者：男、11歳、初診1965年3月29日

主訴：熱感を伴う頭部の腫れ痛みが起こって4日になる。

現病歴：この4日間、後頭部が突然でっぱり、腫れて痛む。痛む部位は拒按であり、触れると熱感がある。食欲不振を伴っており、脈は滑数であった。

弁証：風熱痰火型の頭痛

治則：疏風清熱導痰

取穴：風池、風府、豊隆（瀉）。

効果：1回の治療で治癒した。1965年7月20日に母親に尋ねたところ、治癒しており再発していないことを確認した。

考察：本症例の弁証のポイントは、後頭部の突然の発熱腫痛、拒按と触診による熱感の確認、および滑数の脈である。これらを根拠として風熱痰火による頭痛として治療を行った。風池（去風通絡、清熱消腫）、風府（去風清熱、消腫止痛）、豊隆（化痰）に鍼で瀉法を施し、去風豁痰、消腫止痛の法を施すことにより効を収めた。風池、風府は局所取穴であり、頭風をとり除くだけでなく、通絡消腫止痛の作用もある。さらに豊隆と配穴することにより局所の痰火を散じることできる。逆に豊隆に瀉法を施して痰濁を除き、これに風池、風府を配穴すると、頭部の風痰火熱を清降させる一助とすることができる。

[症例5] 胃火頭痛

患者：男，72歳，初診1971年10月9日

主訴：頭痛を患って半月余りになる。

現病歴：半月来，前額部に熱痛が起こり，頭懵^{ぼう}〔頭がぼんやりすること〕が起こる。熱かたり，日にあたり，光を見たり，午後になると増悪するが，冷やすと楽になる。両目の眼花，視力低下，多夢，不眠，悪食，悪心，食欲不振，口乾があり時に渴く，舌辺の熱痛といった症状を伴っている。顔面は紅潮しており，舌質は紅，舌苔は白，脈は数で有力である。血圧は141/80mmHgであった。

弁証：胃火型の頭痛

治則：清降胃火

取穴：解谿，内庭（瀉）。

効果：3診後に頭痛は軽減し，7診後に諸症状はすべて消失した。1971年11月13日に治癒していることを確認した。

考察：口乾があり時に渴く，悪食，悪心，顔面の紅潮，舌辺の熱痛，舌質紅，舌苔白，脈数有力などは，胃熱熾盛の現れである。前額部は足陽明経が循行している部位である。胃熱熾盛となり熱が循経によって上擾し，清空に影響し前額部の脈絡が阻滞すると，前額部の熱痛，頭懵が起こり，熱かたりすると症状が増悪する。熱が神明に影響すると多夢，不眠が起こる。証は胃火頭痛に属しているので，足陽明胃経の解谿と内庭を瀉して清降胃火と陽明経気の宣暢をはかって効果を得ることができた。

[症例6] 痰濁頭痛

患者：男，15歳

主訴：頭痛を患って9カ月になる。

現病歴：9カ月前から後頭部痛が起こり始め，天気が悪いと痛みが増強する。その後，試験のため頭を使いすぎて頭痛が増強し，発作性の痛みを呈するようになった。前額部に痛みを感じる時もある。平素から頭暈，悪心，耳鳴り，口乾・不渴，食欲不振などの症状がある。舌苔は白膩，脈は濡数であった。

弁証：痰濁型の頭痛

治則：化痰去湿，佐として通絡止痛をはかる。

取穴と効果：初診：豊隆，陰陵泉（瀉）により化痰利湿降濁をはかる。置鍼15分後に後頭部痛はほぼ消失したが，軽い頭暈を感じる。

2診：上処方¹に風池（瀉）を加えて通絡止痛をはかる。

3診：口渴多飲がある。舌苔は膩でなくなった。脈数であるが濡はなくなった。これは湿邪がすでに去っている象である。風池，崑崙（瀉）とする。これは循経取穴と局所取穴を採用したものであり，これにより通絡止痛をはかった。

4診：風府穴の部位が少し痛む。口乾口粘，渴いて多飲するといった症状があるが，これは胃熱熾盛によるものである。風府（瀉）を局所取穴として取り通絡止痛をはかることとする。また足陽明胃経の内庭を循経取穴として取り，透天涼を配して清瀉胃熱をはかった。内庭の涼感²は本経に沿って顔面と口唇にいたり，最後には舌尖と口腔内にいたると，口渴と口粘はただちに消失した。

5診：処方，手技，鍼感は4診と同じであった。

6診：頭痛，口渴，悪心はすべて消失した。内庭への瀉法に透天涼を配すと，涼感²は4診と同じであった。1971年5月に父親から治癒していることを確認した。

考察：本症例は，脾失健運のために生じた痰濁に胃熱がからんで上擾し，経絡阻滞，清陽不昇となって起こった痰濁頭痛証候である。豊隆，陰陵泉（瀉）に風池（瀉）を配穴した化痰去湿降濁の法を主とし，佐として通絡止痛をはかって効果を収めることができた。3診後には頭痛はほぼ治癒したが，胃熱熾盛が出現したため解谿，内庭，風府（瀉）による清瀉胃熱の法に改めた。さらに佐として局所取穴を加え通絡止痛をはかって治癒させることができた。風府と風池には頭部の風を除く作用がある。本症例では通絡止痛をはかる目的で用いた。豊隆と陰陵泉を配穴して用いると，二陳湯の効に類似した作用がある。

[症例7] 肝陽頭痛

患者：男，30歳，初診1979年1月26日

主訴：頭痛を患って15年になる。

現病歴：15年前に眼病を患い，同時に頭痛が出現した。ただし眼病が治癒した後も頭痛は残った。その2年後に頭痛は治癒したが，7年前にまた頭痛が再発した。某医師が頭痛は日光の関係であるとしサングラスをかけるようにいわれたが，サングラスをしても頭痛は改善しなかった。その後，ずっと薬を服用しているが，服薬後に頭痛は1～2時間止まるだけである。

現症：両側の頭部，前額部，眼窩部に発作性の跳痛がある。時々ではあるが熱痛，眩暈，耳鳴り（昆虫が耳内にいるような感じ）が起こったり，両耳の閉塞感，多夢不眠，胸痛，両下肢と殿部のだるい痛みといった症状が起こることがある。胃炎のために食欲不振となり，時々胃痛が起こり，食べても味がしない。舌苔は薄黄，舌中央にはかなり深い裂紋がある。脈は弦数であった。

弁証：肝陽型の頭痛

治則：平肝潜陽熄風，佐として通絡止痛をはかる。

取穴：初診～11診：百会，太陽，風池，太衝（瀉）。12～16診：上処方から太衝を除く。

効果：3診後には頭痛と眩暈は軽減した。5診後には不眠は著しく軽減した。7診後には頭痛と眩暈が著しく軽減し，耳内の虫のはうような感じは消失した。そして安眠薬を服用しなくても6～7時間ほど睡眠できるようになった。ただし時々ではあるが両耳に閉塞感が起こったり，両側の胸脇部に痛みが起こったりする。11診後には不眠と頭暈は治癒した。頭痛もかなり軽微になった。16診で治癒した。16回の治療で頭痛，眩暈，不眠などすべてが治癒していることを確認した。

考察：本症例は頭痛の部位や痛みの特徴，さらに眩暈，耳鳴りといった随伴症状，脈弦数などにもとづいて，肝陽上亢，肝風内動，上擾清空による頭痛証候と判断した。肝経の原穴である太衝（瀉）により平肝潜陽熄風をはかり，頭頂部の百会（瀉）により熄風をはかった。また足少陽経の後項部にある風池（瀉）により熄風と通絡止痛をはかり，太陽（瀉）を局所取穴として用い通絡止痛をはかった。これらの配穴により平肝潜陽熄風，佐としての通絡止痛の効果を収め，治癒させることができた。

[症例8] 少陽，胃火頭痛

患者：男，32歳

主訴：頭痛を患って1カ月余りになる。

現病歴：1カ月余り，両側の側頭部に発作性の跳痛，刺痛が起こる。また耳鳴り，口苦，咽頭の乾き，口渇，口臭，尿黄，便秘といった症状を伴っている。呼吸は荒く，顔面は紅潮している。舌苔は黄厚，脈は数有力であった。

弁証：少陽，胃火型の頭痛

治則：清宣少陽，清降胃火

取穴と効果：初診：風池，内庭，丘墟（瀉，透天涼を配す）。風池の涼感は頭頂部と側頭部にいたるようにする。内庭の涼感の本経に沿って下腿部にいたるようにする。丘墟の涼感の本経に沿って大腿部にいたるようにする。

2診：頭痛，口渇，尿黄，便秘はある程度軽減した。口苦と耳鳴りはまだある。取穴と手技は初診同様とする。

3診：取穴と手技は初診同様とする。

4診：頭痛および兼症はともに治癒した。さらに1回治療を行い効果の安定をはかることとした。取穴と手技は初診同様とする。風池の鍼感は頭頂部にいたらせ，内庭の涼感としびれ感の本経に沿って唇と面頰部にいたらせる。丘墟の涼感としびれ感の本経に沿って側頭部と耳にいたらせる。

考察：本症例は2種類の病因病機によって起こった頭痛の症例である。足少陽の脈は耳と側頭部を循行している。側頭部の発作性の跳痛，刺痛に口苦，耳鳴りを伴っているが，これは足少陽胆経に熱があり，その熱が循経によって上擾して起こったもので

ある。これはつまり少陽頭痛である。したがって足少陽胆経の原穴である丘墟（瀉）により少陽経気の清宣をはかった。足少陽経の経穴で頭部にある風池（瀉）は局所取穴によるものであり，これにより清熱通絡止痛をはかった。便秘，咽頭の乾き，口渇，顔面紅潮，舌苔黄，口臭は胃熱熾盛によるものである。足陽明胃経の内庭（瀉）により清降胃火をはかった。本症例の配穴は，丘墟（瀉）により少陽頭痛を治し，内庭（瀉）により清降胃火をはかって胃火頭痛を治すことを目的としたものである。さらに局所穴の風池（瀉）を配穴したが，これで少陽頭痛を治すとともに通絡止痛をはかることができる。この3穴の配穴により4回の治療で，2種類の病因病機による頭痛を治癒させることができた。効果の鍵は配穴にあることがわかる。

[症例9] 瘀血頭痛

患者：男，35歳，初診1976年10月28日

主訴：外傷性の頭痛を患って3年になる。

現病歴：1973年3月に壁が倒れてきて前額部を打ち，口に怪我をおい，ひどく鼻出血が出た。当時，気を失って倒れ，当地の病院で救急措置を施された。意識が回復した後，後遺症として頭痛が残った。痛みは前額部にあり，痛みの部位は一定しており，刺痛を呈している。跳痛，激痛となることもある。痛みがひどい時には，頭暈，頭昏が起こる。平素から健忘症があった。考え事をしたり，頭を振動させると頭痛が起こりやすく，あるいは頭痛が増強する。舌質は紫，脈は沈澹であった。中西薬を長期間服用しているが，あまり効果がない。

弁証：瘀血型の頭痛

治則：活血去瘀，佐として通絡止痛をはかる。

取穴：三陰交，神庭（瀉）。隔日治療とする。

効果：2診後，頭痛は軽減し，発作回数は減少した。3診後，考え事をしたり頭を振動させても頭痛はあまり起こらなくなった。4診後，頭痛は1日に数回あるいは1回ほどとなり，健忘は軽減した。5診後，毎日不定時に前額部に微痛が1～2回起こるくらいになり，頭昏は著しく好転し，6診で治癒した。

1977年4月8日に患者が来院し頭痛が治癒していることを確認した。頭昏と健忘もそれにつれて治癒したとのことであった。

考察：本症例は頭部外傷により瘀血内停となり，脈絡が阻滞して起こった瘀血頭痛である。弁証取穴として三陰交（瀉）を取穴して活血去瘀をはかり，局所取穴として神庭（瀉）を配穴し通絡止痛をはかって効果を収めることができた。頭暈，頭昏，健忘といった症状は瘀血内阻および頭部外傷と関係するものであり，虚証として対処する必要はない。瘀血頭痛の治癒とともにこれらの症状は治癒した。

[症例10] 肝陽頭痛

患者：女，20歳，初診1978年12月19日

主 訴：頭痛，頭暈を患って1年になる。

現病歴：1年前，監獄に入れられ，何度も精神的な打撃を受けて発症した。1年来，頭痛の反復発作が3度起こり，3度入院治療を受けた。頭全体の熱痛，跳痛，刺痛が見られ，頭暈，眼花，多夢，不眠，食欲不振，飲食減少，食後の胃の不快感，口苦，心煩，怒りっぽい，口渇多飲，両下肢の一時的なひきつり，または拘急やふるえ，身体痛，背部痛，四肢無力，歩行障害，立つと倒れそうになる，精神抑鬱といった症状を伴っている。舌苔は薄黄少津，脈は沈細弦であった。

弁 証：肝陽型の頭痛

治 則：平肝潜陽，通絡止痛，佐として清心安神をはかる。

取 穴：初診～2診：太陽，風池，神門，百会（瀉）で熄風清腦，清心安神，通絡止痛をはかる。

3～6診：上処方にて太衝（瀉）を配穴して平肝熄風をはかる。

7～9診：太陽，風池，神門，太衝（瀉）。

10～12診：上処方から風池を除く。

効 果：2診後，両下肢の症状以外の頭痛，頭暈，心煩，怒りっぽい，不眠，胃の不快感といった症状は著しく軽減した。精神抑鬱も著しく好転している。7診後，諸症状はほぼ治癒している。9診後，頭痛はほぼ治癒している。前額部の左側にわずかに痛みがあるだけで，他に異常は認められなかった。10～12診で効果の安定をはかった。

考 察：怒ると気は上る。本症例は鬱怒傷肝，肝鬱氣滯，氣鬱化火，肝陽上亢により頭部の熱痛，跳痛，刺痛が起こり，眩暈を伴っているという症例である。肝は筋を主っているが，氣滯筋脈となると全身の痛みや下肢筋脈の拘急，ふるえといった運動失調が起こる。また肝氣犯胃となると食欲不振，食後の胃の不快感が起こり，口苦を伴うようになる。さらに肝火が神明に影響すると心煩，怒りっぽい，多夢，不眠となる。精神抑鬱，舌苔は薄黄少津，脈は沈細で弦などは，肝氣鬱滯，肝陽上亢の象である。太陽（局所取穴，通絡止痛），風池（弁証取穴としては熄風清腦安眠，局所取穴としては通絡止痛），神門（清心安神），百会（弁証取穴としては熄風潜陽，局所取穴としては通絡止痛），太衝（平肝潜陽，疏肝理氣）といった諸穴を加減運用することにより，平肝潜陽，通絡止痛，佐としての清心安神の効を収め，治癒させることができた。

[症例11] 痰濁頭痛

患 者：女，31歳，初診1982年3月27日

主 訴：数日来，頭痛が起こる。

現病歴：患者は2年前，輸卵管の結紮手術後に頭暈を感じ始めた。1日に3～4回暈厥〔失神する〕を起こすようになり，当地の病院で20日余り治療を受けたが治癒しなかった。その後，暈厥が何度も出現するようになった。今月17日に当病院神経科で癡病〔ヒステリー病〕と診断され，現代薬で治療したが頭暈は減らず，かえって頭痛，

不眠も出現するようになった。

現 症：頭痛が発作的に起こり，鍼で刺したように痛み，痛みのために呻めいている。早朝と正午は痛みが軽い，午後になるとひどくなる。頭部が重くしめられるように感じられる。頭暈，頭昏があり，ひどいと暈厥を起こす。悪心，厭食，食べると吐く，息切れ，懶言〔話すのがおっくう〕，倦怠無力，聴力減退，口苦，心煩，ひどい不眠（毎晩2～3時間しか眠れない），意識がぼんやりしている。舌質は淡で口が粘る。舌苔は白膩，脈は細でやや数であった。

弁 証：痰濁型の頭痛

治 則：去湿化痰，理氣和中，佐として清心醒志をはかる。

取 穴：初診～4診：豊隆，陰陵泉，大陵（瀉）。

5診：上処方から大陵を除く。

効 果：初診後，頭痛は軽減し，食欲は正常に回復した。食事をしても悪心・嘔吐が起こらなくなった。2診後，夜間の睡眠は4～5時間とれるようになった。ただ両側頭部が痛むだけで，嘔吐および暈厥は治癒した。頭もすっきりしている。4診後，わずかに頭痛，頭暈を感じるだけとなり，夜間も8時間は眠れるようになった。5診で治癒した。半年後に患者の知人から治癒しており，再発していないことを確認した。

考 察：本症例は脾の水湿の運化が悪くなり，湿が集まって痰となり，この痰湿が頭部絡脈に阻滯し血行が悪くなって起こったものである。したがって刺すような頭痛が起こり，午後に増強するのである。痰濁が清竅に上蒙すると頭重，頭暈，頭昏が起こり，ひどい場合は暈厥となる。痰湿が中焦に阻滯した場合は，嘔悪，厭食となり，食べると吐いてしまう。また脾胃の運化と受納が悪くなって化源不足になると，息切れや懶言，倦怠，無力感，聴力減退といった症状が出現するようになる。痰邪が心に影響した場合は，意識がはっきりしなくなり，不眠，心煩が起こったりする。舌質淡，口が粘る，舌苔白膩，脈細でやや数といった所見は痰湿内蘊の象である。治療は豊隆（去痰降濁），陰陵泉（去湿益脾）による去湿化痰，理氣和中を主とした。これは二陳湯に類似した効がある。さらに大陵を配穴し佐として清心醒志をはかった。配穴が適切であったために非常に良い効果を収めることができた。

[症例12] 陽明頭痛

患 者：男，56歳，初診1981年7月5日

主 訴：前額部痛を患って2年になる。

現病歴：2年前の夏に暑さにより頭痛が起こるようになり，中西薬で1年余り治療を受けたが効果がなかった。前額部に刺痛があり，熱いと痛みが増強する。痛みは軽くなったり重くなったりするが，痛みがひどい場合は，左側頭部に跳痛が放散する。毎日午前11時～午後4時に頭痛が増強する。平素から口乾，口粘，口臭といった症状がある。舌苔は薄黄，脈は数で有力であった。

弁 証：陽明経頭痛

治 則：清宣陽明鬱熱

取 穴：合谷，解谿（瀉）。1～2日おきに鍼治療を1回行うこととする。

効 果：2診後に頭部は隠痛となり，脈数有力は顕著ではなくなった。4診後には前額部は痛まなくなった。7診後には左側頭部も痛まなくなり，舌苔は薄白となった。10診で頭痛は治癒した。

患者は1981年8月7日～8月21日まで当病院で頸部リンパ結核の治療を受けたが，頭痛の再発は見られなかった。

考 察：本症例は陽明熱邪が循経によって上擾し，熱が足陽明経の関連部位に鬱して起こった頭痛証候である。弁証のポイントは，痛みが前額部にあり，熱いと痛みが増強し，正午から午後になると増悪することにある。口乾，口臭，舌苔薄黄，脈数有力は，内熱の現れである。したがって手陽明経の原穴である合谷と解谿を瀉し，陽明鬱熱を清宣させるという法を用いて効を収めることができた。

[症例13] 少陽，厥陰頭痛

患 者：女，81歳，初診1981年6月12日

主 訴：頭痛を患って5年になる。

現病歴：5年来，左側頭部および頭頂部がよくしびれて緊張し，跳痛，熱痛が起こる。平素から口苦，口粘〔口が粘ばる〕，食欲不振といった症状がある。舌苔はやや黄厚膩，舌質は絳，脈は弦数であった。血圧は150/90mmHgである。本院の内科で三叉神経第一支痛として薬物治療を行ったが効果がなかった。

弁 証：少陽，厥陰経頭痛

治 則：清宣少陽，宣暢厥陰経気

取 穴：太衝，丘墟（瀉）。1～2日おきに鍼治療を行うこととする。

効 果：初診後に頭痛は軽減した。3診後に頭痛は止まり，4診で治癒した。1981年8月と1983年，1984年連続して3年追跡調査を行ったが再発は認められなかった。

考 察：痛みのある部位と痛みの特徴から，少陽，厥陰頭痛であることがわかる。循経取穴とし，足少陽経の原穴である丘墟（瀉）により少陽経気の清宣をはかった。また足厥陰経の原穴である太衝（瀉）により厥陰経気の宣暢をはかった。取穴は少ないが，速やかに効を収めた。2経同病であり，循経取穴により各経の原穴を瀉すだけで効を収めることができた。

[症例14] 肝陽，胃火頭痛

患 者：女，37歳，初診1979年5月21日

主 訴：頭痛を患って半年になる。

現病歴：1978年12月から持続性の頭痛が起こり始めた。昼間に痛みがひどくなり，夜間には痛みは止まる。前額部と両側頭部に痛点がある。さらに頭暈，眼花〔目のくらみ〕，身体の消瘦，無力感，不眠，健忘，心煩，耳鳴り，午後の手足心熱といった症状を

伴っている。怒った後には頭痛と頭暈が増悪する。顔色は紅潮しており，口渇がある。1年余り，怒ったり疲れたりすると，心悸，息切れ，手指のふるえ，不眠などが出現する。心電図には異常はなかった。聴診では期外収縮が認められた。1年来，しばしば頭暈，貧血が起こる。

弁 証：肝陽，胃火型の頭痛

治 則：平肝潜陽，清降胃火，佐として通絡止痛をはかる

取 穴：初診～2診，8～11診：内庭，太衝（瀉）。

3～7診：上処方に太陽（瀉）を配穴する。

効 果：5診後には頭痛，煩渴，頭暈は軽減し，不眠は著しく好転した。7診後に頭痛はほぼ治癒した。8～11診は治療効果の安定をはかった。1979年6月20日～7月4日，患者は本科で息切れ，心悸，頭暈と手指のしびれなどの虚勞証候の治療を受けたが，頭痛は治癒しており再発は認められなかった。

考 察：本症例は，肝陽上亢となって清空に上擾し，また胃火熾盛となって循経上擾して起こった肝陽頭痛と胃火頭痛の混合型である。足厥陰肝経の原穴である太衝（瀉）により平肝潜陽をはかり，足陽明胃経の榮穴である内庭（瀉）により清降胃火をはかった。3～7診では局所取穴として太陽（瀉）を加え，佐として通絡止痛をはかった。本症例は頭暈，眼花，身体のだるさ，無力感，息切れ，心悸，健忘といった虚勞証候を伴っている。これらは頭痛証候が起こる以前からあるため，頭痛証候の弁証範囲に入れることはできない。さもないと混乱して矛盾が生じてしまい，弁証論治が横道にそれる可能性がある。さらに肝陽，胃火頭痛の他に，耳鳴り，口渇，心煩，顔色紅潮とか，怒った後に頭痛が起きたり，頭痛が増強するといったものを佐証とした。これらを虚勞として治療すると，頭痛は必ずひどくなるので注意を要する。

結 語

1. 症例のまとめ

本篇では14症例を紹介した。

例1は腎虚（腎陽虚）による頭痛である。関元，復溜（補）による温補腎陽の法を用いて，効を収めた症例である。

例2は気血虧虚による頭痛である。合谷，三陰交（補）による補益気血，佐として通絡止痛をはかるという法を用いて，効を収めた症例である。

例3は気虚，腎虚による頭痛である。合谷，復溜（補）による益気補腎の法を用いて，効を収めた症例である。

例4は風熱痰火による頭痛である。風池，風府，豊隆（瀉）による疏風清熱導痰の法を用いて，効を収めた症例である。

例5は胃火による頭痛である。解谿，内庭（瀉）による清降胃火の法を用いて，効を収め

た症例である。

例6は痰濁による頭痛である。豊隆、陰陵泉、風池（瀉）による化痰去湿、佐として通絡止痛をはかるという法を用いて、効を収めた症例である。

例7は肝陽による頭痛である百会、太陽、風池、太衝（瀉）による平肝潜陽、佐として通絡止痛をはかるという法を用いて、効を収めることができた症例である。

例8は少陽経の熱、胃火による頭痛である。内庭、丘墟、風池（瀉）による清宣少陽、清降胃火の法を用いて、効を収めた症例である。

例9は瘀血による頭痛である。三陰交、神庭（瀉）による活血去瘀、佐として通絡止痛をはかるという法を用いて、効を収めた症例である。

例10は肝陽による頭痛である。太陽、風池、神門、百会、太衝（瀉）による平肝潜陽、通絡止痛、佐として清心安神をはかるという法を用いて、効を収めた症例である。

例11は痰濁による頭痛である。豊隆、陰陵泉、大陵（瀉）による去湿化痰、理気和中、佐として清心醒志をはかるという法を用いて、効を収めた症例である。

例12は陽明頭痛といわれるものである。合谷、解谿（瀉）によって陽明経気の清宣をはかって効を収めた症例である。

例13は少陽、厥陰頭痛の症例である。太衝、丘墟（瀉）による清宣少陽、宣暢厥陰の法を用いて、効を収めた症例である。

例14は肝陽、胃火による頭痛である。内庭、太衝、太陽（瀉）による平肝潜陽、清胃降火、佐として通絡止痛をはかるという法を用いて、効を収めた症例である。

例6と例11は、ともに痰濁による頭痛であるが、兼証の違いにもとづいて例6は佐として通絡止痛をはかり、例11は佐として清心醒志をはかった。また例7と例10は、ともに肝陽による頭痛であるが、これも兼証の違いにもとづいて例7は佐として通絡止痛をはかり、例10は佐として清心安神をはかった。

14の症例中、例3、例8、例13、例14は、ともに2種類の異なる病因病機、証型による頭痛証候である。その治療法則と選穴は、この点を考慮して1つの処方に二重性をもたせたものである。取穴は多くないが、切れ味のよい効果を収めていることが特徴である。

2. 頭痛の治療について

1. 諸経の頭痛

頭痛の部位の違いにもとづいて、弁証循経取穴を行う必要がある。例えば、太陽頭痛には崑崙（瀉）を用いたり、これに後谿（瀉）を加えるとよい。少陽頭痛には丘墟（瀉）を用いたり、これに外関（瀉）を加えるとよい。陽明頭痛には解谿（瀉）を用いたり、これに合谷（瀉）を加えるとよい。厥陰頭痛には太衝（瀉）を用いたり、大敦（灸）を加えるとよい。

本経の走行に沿って鍼感を頭部にいたらせることができると、非常によい効果を収めることができる。瀉法を施すと、関連する経絡の経気を宣暢させることができ、これに透天涼を配すと、関連する経絡の熱邪を清宣させたり、清降させることができる。また必要に応じて

局所穴（瀉）を配穴すると、作用が直接病所にいたり通絡止痛の効果を収めることができる。

2. 外感頭痛

外感頭痛は六淫の邪が頭部に影響し、頭部で邪気が阻滞し清陽が抑止されることにより起こるものである。治療は疏風散邪を主とし、それぞれ邪の違いに応じて疏風散寒、疏風清热、去風勝湿といった法を用いるとよい。

3. 内傷頭痛

内傷諸疾により気血逆乱や瘀血阻滞、脳失栄養となって起こるものが多い。病証にもとづきそれぞれ平肝、滋陰、補気、養血、去瘀、化痰といった法を用いるとよい。

4. 他の病に頭痛を伴う場合

いろいろな急性あるいは慢性疾患に出現する1症状としての頭痛に鍼灸治療を用いた場合は、一時的に痛みを緩解させる効果を得ることしかできない。このような場合は、その疾患を治療すべきであり、その疾患が治癒すれば頭痛も自然に治癒する。あるいはその疾患を治療すると同時に頭痛治療の関連穴を配穴するとよい。

その他

1. 弁証取穴と局所取穴について

頭痛の治療においては、頭部の痛みという一現象（標）のみに着眼して局所取穴を行っても、理想的な効果を得るのは難しい。とりわけ長期にわたって持病をもっている患者に対して、証型を分けずに対症治療を施しても、よい効果を収めることはできない。場合によっては治療すれば治療するほど症状が増悪することさえある。

気虚、血虚、気血虧虚、腎虚、肝陽、痰濁、瘀血、胃火といった証型の頭痛は、しっかりと弁証取穴を行う必要がある。実証のものに対しては証型にもとづいて、それぞれ清肝、平肝潜陽、去瘀、化痰、清降胃火といった本の治療をベースにし、局所穴（瀉）を配穴して標を治すとよい。また本虚標実のものには、それぞれ補腎、補気、養血、補益気血といった本虚の治療をベースにし、局所穴（瀉）を配穴して標実を治すとよい。虚証のものに対しては、一般的に局所穴は配穴しない。もちろん局所穴に補法を施すといったことはすべきではない。もし補法を施すと、経絡や気血を阻滞させる可能性があるからである。三陽経および厥陰経の頭痛にも、弁証循経取穴による本治をベースにし、局所穴（瀉）を配穴して標を治すのがよい。

2. 「通則不痛」(通ずれば則ち痛まず)の臨床応用

「通則不痛」という方法は、通じさせる方法によって止痛という目的を達成するものである。この「通」という字には、多くの意味がある。単純に攻下通利を指していったものではない。頭痛の病に対する通法は、経絡を通暢させることを指したものである。本篇で紹介した【弁証施治】と【症例】から見ると、各種の異なった治療法則を用いて「通則不痛」という目的を達成していることがわかるはずである。単純に攻下通利や通暢経絡の法だけを用いたものではないのである。

例えば風寒、風熱、風湿、瘀血、痰濁、肝陽、胃火などによって起こった頭痛には、それぞれ去風散寒、去風清熱、去風除湿、活血去瘀、去湿化痰、平肝潜陽、清降胃火といった法を用いることによって、通暢経絡、止痛という目的を達成しているのである。また気虚、血虚、腎虚、気血虧虚による頭痛に対しては、それぞれ補気、養血、補腎、補益気血といった法を用いて、血を補充し、腎を強め、気を補充し経脈を栄養することによって、滞っていた経絡を通暢させ、止痛の目的を達成するのである。虚中挟実のものに対しては、局所穴(瀉)を配穴し、佐として通暢経絡をはかって止痛をはかるとよい。単独に通暢経絡の法を用いて止痛がはかれるのは、ただ頭部のある部位が痛むといった単純性の痛みについてのみであり、こういった場合のみ局所取穴の法を用いることができるのである。内傷諸疾による頭痛に対しては、通法のみでは満足のいく効果を収めることはできないのである。